

# 安曇野の原風景を巡る ふるさとウォッチングマップ

No.24

## 明科光地区

-東山山麓古代の道 川手往還を歩く-

犀川右岸に連なる東山山麓の河岸段丘上には、縄文時代から続く集落遺跡が多数残されています。それぞれの集落を貫いて、古代には「川手道」と呼ばれる道が形づくられ、江戸期には一部現在の国道19号と重なりながら、川手往還と呼ばれる道となりました。

道筋一帯に残る縄文から現代までの様々な歴史の痕跡を巡り歩くことのできるエリアです。



◆コースタイム ※時間は歩速3km/時としての目安です(休憩含まず)

**スタート** 長峰荘→約0.8km\*16分→北村御嶽様→約0.3km\*6分→北村遺跡→約0.3km\*6分→医王山長光寺→約1.5km\*30分→二一七共有地の展望→約0.2km\*4分→光明科堰→約0.5km\*10分→光照山宗林寺→約0.6km\*12分→正林山給然寺→約0.6km\*12分→長峰荘 **ゴール** 【合計】約4.8km：1時間36分



(a) 如実筆塚  
使った筆への感謝を込めて建立した塚



(b) 光五社宮  
洪水を避けるため1779年に現在の地に移転



(e) 中条公民館（十王堂跡）  
いずれの石造物も1800年代に建立



(d) 篠ノ井線  
1902年に開通。長野と松本を結ぶ鉄道。



(c) 奥沢付近のマンホールのふた  
旧豊科町と旧明科町の2種類が沢を挟んで対峙

【注】マップ内の情報はふるさとウォッチングを開催した2017年4月23日現在の内容です。

**NPO法人 安曇野ふるさとづくり応援団  
安曇野案内人倶楽部**  
※本マップは下記のサイトからダウンロード可能です  
<http://azumino-sanpo.info/>



## ① 北村御嶽様

段丘端の小高い丘は北村の信仰の中心でした。隣接して大日堂などもあり、各種の石造物が建立されています。明科の石造文化財で最も多いのが馬頭観音です。光地区では江戸時代には1戸平均2頭の馬を所有していました。この地でも長野自動車道の建設のために光から移設された明治33年(1900)当時のものが確認できます。



北村御嶽様

## ② 北村遺跡

長野自動車道建設時に発見された遺跡です。昭和63(1988)～平成3年(1991)にかけて発掘調査が行われ、縄文人骨190体が発掘され、日本の考古学・人類学史上最大の発見と言われています。このほか、住居跡50軒超、石器類で約17300点、縄文土器、仮面土偶等、古代までの生活を伝える様々な遺構や品々が出土しています。



北村遺跡の所在を伝える石碑

## ③ 医王山長光寺

真言宗の寺院、最初は長光寺山(びんぐし山)山頂にあって薬師堂門寺といました。兵火によって荒廃していた寺を天正10年⑧(1582)に現在地に移して建立。光氏が開基したという伝承があります。元禄時代の大町の名工・金原作助が改築に関わっており、地域の大工の作風を知る上で貴重な建築物です。  
【薬師堂・内陣厨子：県宝】



医王山長光寺

## ④ 二一七共有地の展望

光から塔ノ原にかけては御宝田と呼ばれる美田が続いていましたが、氾濫のために田畑の境界が不明確になり、村の中でも争いが絶えませんでした。解決策として、川原に耕作権を有した人が217人の共有地とし、数年一度割替えて耕作し、美田が維持されました。昭和54年(1979)にようやく個人所有の登記が行われました。



二一七共有地の展望

## ⑤ 光明科堰

大正10年(1921)、古くからあった光堰を利用して、塔原の発電所の水を確保するために安曇電気が改修・建設しました。

現在は、農業用水としての利用を優先しており、明科の全水田の半分以上の面積を潤しています。



光明科堰

## ⑥ 光照山宗林寺

武田信玄と戦って二度退けた坂城の戦国武将・村上義清の3男義照(故念和尚)が天正3年(1575)に宗源寺として開山したと伝わっています。山門は天明年間～文化4年(1807)の間に建立され階上は鐘楼となっています。本堂は松本の生安寺の本堂を移築したもので、江戸中期以前の建築として貴重です。



光照山宗林寺  
【山門・本堂：市有形文化財】

## ⑦ 正林山給然寺

浄土宗の寺院で、明暦2年(1656)に宗林寺の隠居寺として創建されました。

本尊は阿弥陀如来像。寺宝に芝増上寺から譲り受けたという観経曼荼羅(極楽浄土の絵)があります。入口に庚申塔：文化13年(1816)、巡礼塔：明和6年(1769)荒神像などがあります。



正林山給然寺

## 北村遺跡

遺跡は、南と北をそれぞれ奥沢・小倉沢に囲まれた犀川右岸第4段丘全域で、東西約400m、南北1200mの範囲に及びます。縄文から古代にかけての生活の痕跡が数多く発掘されており、なかでも特徴的なのは縄文期の人骨。埋葬状態が良い人骨は、その周囲を掘り下げ、段ボールや和紙で覆い、ウレタンフォームを流し込んで取り上げたそうです。人骨に含まれる窒素・炭素の同位体の分析からクリ、トチ、コナラなど植物性の食性であったと推定されています。

